

「ラケル、男の子を産む」

2021年04月01日

一方、神はラケルを忘れず心を留めておられた。神は彼女の願いを聞き入れ、その胎を開かれた。彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の恥を取り去ってくださった」と言い、その子をヨセフと名付け、「主が私にもう一人男の子を加えてくださいますように」と言った。(創世記 30 章 22 節～24 節)

小麦の刈り入れの頃、レアの長男ルベンが野原に出かけ、恋なすびを見つけ、母レアのところに持って帰った。ラケルはそれを見て、レアに、「あなたの子の恋なすびを分けてください」と頼んだ。レアは、「あなたは私の夫を奪っただけではまだ足りないと言うのですか。私の子どもの恋なすびまで奪おうとするのですか」と怒った。恋なすびは、ナス科の植物で、媚薬草として用いられるが、全草が有毒で、特に根には幻覚、幻聴を引き起こす。根茎が幾枝にも分かれ、個体によっては人形に似ている。雅歌 7 章 14 節に、「恋なすびは香りを放ち／見事な実はすべて私たちの戸口にあります。私の愛する人よ／新しい実も古い実も、あなたのために／大切に取っておきました」と記されている。恋なすびは「愛を誘発するもの」で、受胎効果があるとされていた。ラケルは、受胎を期待して、恋なすびを求めたのであろう。不妊の女の切なる願いであった。ラケルは、「それでは、あなたの子どもの恋なすびと引き換えに、今夜はあの方があなたと寝るようにしましょう」と、恋なすびをもらう代わりに、夫と床を共にすることを認める交換条件を出している。

夕方、ヤコブが野原の仕事を終え、帰って来た。彼は、愛するラケルの元に行こうとしている。すると、レアがヤコブを出迎え、「私のところに入ってください。私は子どもの恋なすびで、あなたを手に入れたのですから」と言って、誘った。ヤコブは言われるままに、その夜は、レアと寝た。ヤコブは、なんと不甲斐ない男であろうか。聖書は父権、夫権が圧倒的な力を持っていると言われているが、族長のアブラハム、イサク、ヤコブも妻たちに振り回されている場面が多々ある。いつの世も、男は威張っているようであるが、実権は女が持っているのが実状かも知れない。レアは身ごもり、五人目の男児を産んだ。「私は夫に召し使いを差し出したので、神はそれに報いてくださった」と言って、「イサカル」と名付けた。レアはまた身ごもって、男児を産んだ。「神は私にすばらしい贈り物をくださった。今度こそ、夫は私を褒めてくれるでしょう。六人もの男の子を産んだのですから」と

言って、「ゼブルン」と名付けた。彼女は更に、女の子を産み、「ディナ」と名付けた。ヤコブは初めて女兒を得、男の子たちは、女の子ディナを珍しがり、可愛がったであろう。

一方、神はラケルを忘れず心に留めておられた。神は彼女の願いを聞き入れ、その胎を開かれた。彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の恥を取り去ってくださった」と言って、その子をヨセフと名付けた。恋なすびの効用ではなく、神の願みで、ラケルはようやく、待望の男児を産んだ。妻の面目を果たし、夫の愛がより確かになると、どれほど喜んだであろうか。さらにラケルは、「主が私にもう一人男の子を加えてくださいますよう」と願った。その願いもかなえられることになる。



恋なすび